建設ぶらり旅

満濃池（まんのういけ）堰堤上の碑

その3

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

さて、満濃池の堰堤上には、高松藩の執政・松崎渋右衛門の辞世の歌碑と、榎井村（現・琴平町）の豪農・長谷川佐太郎の顕彰碑が建てられている。この二人は、満濃池の歴史において大変重要な工事の功労者だ。

寛永八（一六三一）年に西嶋八兵衛によって再築された満濃池だったが、堰堤底に設置された配水用の水道トンネル「底樋」が木製なので、すぐに腐ってしまい、たびたび取り替えなければならなかった。『讃岐のため池誌』によれば、寛永八年の再築から約二二〇年の間一二回、平均して約一八年ごとに工事が行われたという。その度に堰堤を掘り起こす大工事となるわけだから、人夫として刈り出された配水域の農民たちにとっては、大変な負担となった。

そこで、なんとか底樋を半永久的なものに変えようと、榎井村の庄屋・長谷川喜平次は、底樋を石管に変える工事を行い、嘉永五（一八五二）年に完成した。しかし、もともと問題が指摘された工事であったためか、安政元（一八五四）年に起った地震で石管が損傷し、漏れ水は激しくなる一方で、一月もたたないうちに満濃池の堰堤は決壊した。

喜平次は事態を収拾しようと奔走するが、満濃池の配水域は高松、丸亀、多度津の三藩にまたがっており、工事にはこれらの合意をとる必要があったため、いたずらに時が過ぎ、ついに満濃池の再築をみることなく、文久二（一八六二）年に六七歳で力尽きた。

そして、この長谷川喜平次の遺志を継いだのが、同じく榎井村の百姓総代となった長谷川佐太郎だった。佐太郎は幕府が瓦解したのを好機として、慶應四（一八六八）年に新政府へ嘆願し、高松、丸亀の両藩が満濃池の再築を行うこととなった。

この時、高松藩の執政・松崎渋右衛門が、堰堤の西側の岩盤を掘り貫いて底樋とすることを思い立った。岩盤の掘り貫きは明治二（一八六九）年九月に着工。翌年三月に貫通し、ここに壊れない底樋という人々の念願は結実した。約五六㍍のトンネル掘削を施工したのは、富田村（現・さぬき市）の軒原庄蔵で、完成も危ぶまれた工事をわずか六カ月で成し遂げ、しかも両側から掘られたトンネルは寸分たがわずピタリと合わさったという。この水道トンネルは現在でも使われている。

ところで、松崎と長谷川のその後だが、勤王家の松崎は、満濃池再築を見ることなく藩内の佐幕派によって惨殺された。長谷川は満濃池の再築工事に家財を投じたため清貧に甘んずるが、非業の最後を遂げた松崎のために、満濃池の堰堤上にある神野神社の社殿後方に小さな祠を建て、松崎神社として祀った。そして彼自身も大正四（一九一五）年の十七回忌の折に合祀され、さらにはトンネル掘削を成し遂げた軒原庄蔵もここに祀られた。

満濃池はその後も改良を加えられ、昭和三十四（一九五九）年に完成した第三次嵩上げ工事をもって、現在の姿となった。（つづく）

満濃池樋門　軒原庄蔵が掘削したトンネルを通って今も水が流れる。

［交通］JR琴平駅、琴電琴平駅近辺から自転車で約40分